

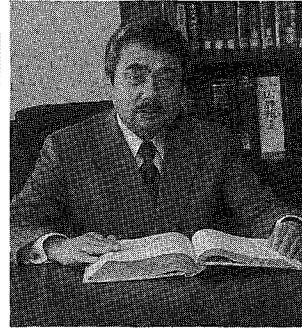
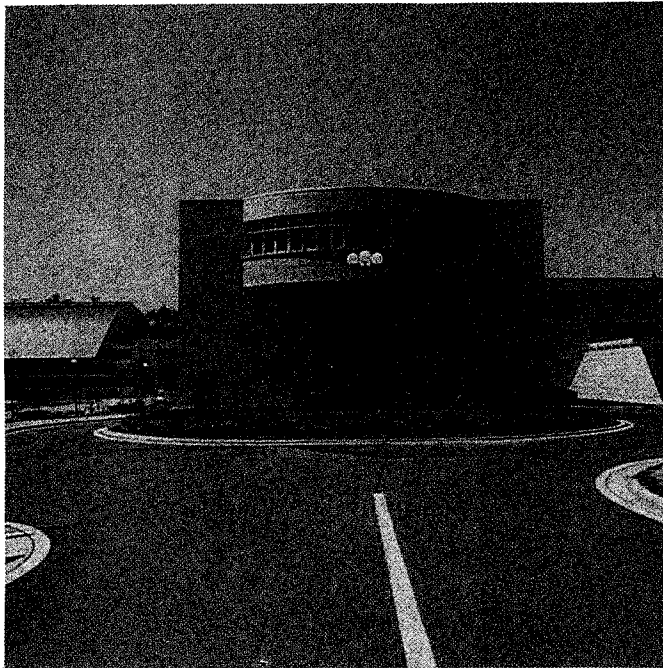
# 新潟産業大学報

# 青海波



## 創刊号

発行日 平成元年 3月25日  
 発行所 新潟産業大学  
 編集 新潟産業大学広報委員会  
 新潟県柏崎市大字軽井川4730番地  
 TEL 0257-24-6655  
 FAX 0257-22-1300



## 学而不思

## 則罔

(論語・為政)

学長 金田 一郎

これまでのわが国の高等教育は、あまりにも「学習」に偏り過ぎていた。学問の領域においても、伝統的な思考方法、大勢に柔順であることが美徳であるかのような雰

囲気があった。「その重圧を払い、除けて創造的な新しい教育と研究の場を作りたい。新設大学ならそれが可能であろう。」——いささか気負ってはいたが、それが開学時の偽らざる気持ちであった。

今、早くも一年が経とうとして、振り返ってみて、事態は良い方向に進んでいる、と私なりに感じている。何と言っても、新設大学の場合、文部省・大学設置審の猛烈に厳しい審査をパスした優秀な教授スタッフと進取の精神に富む学生の存在が一番の強みである。大学作りの構想の段階から、

学部の特徴についても、伝統に捉われない、創造的な教育と研究の場を作ることを第一に考えてきたが、それも着々と実現の方向にある。経済学と経営学をシステム思考の場で結合する、ということも一つの大きな試みである(この趣旨は、大学設置認可申請時に大学設立構想の一部として学内のコンセンサスの下に文部省に文書で提示された)。コンピュータを駆使して、社会現象の全体(森)と個(木)を共に、統一的に捉えようというのである。

伝統的な社会科学は、社会を人間が制御しえないものとして捉えてきた。社会現象の背後にある膨大な数の要因を把握し処理することは、殆ど絶望的であったからで

ある。そこから「疎外」(Eit-fremdung)の概念が生じた。社会は、個々の人間が「好むと好まざると」それ自体の必然の方向に進むべき存在であった。しかし、コンピュータの出現が事態を一変した。人間が社会システムを制御し思う方向に変えていくことが、可能となったのである。人間は、対社会的な面でもその創造性を高めたということが出来る。システム思考が頃にその重要性を増すこととなった所以である。

システム思考は、対象の実体より関係を重んずる点で、実存主義後の有力な思潮となった構造主義やポスト構造主義の流れとも軌を一にしている。われわれは、現在の状況の中で自らの位置づけを絶えず確認しながら、社会的な創造の仕事に自らをアングラジェ(engager)していきたいと思っている。われわれは、アカデミズムを踏まえながらも、思考を基とするシステムの、創造的研究・教育を重視していきたい。——勿論、学問の自由を侵さない範囲内においてである。





### 地方都市と大学

理事長  
柏崎市長  
飯塚 正

急速に進行する国際化、情報化、高齢化など、現在の社会・経済環境は、どれをとってみても大きな変革期を迎えている。そうした状況の中で、時代に敏感で変化の荒波を乗り切っている人材が、今何にも増して求められているのであり、大学の果たすべき役割は益々重要なものとなってきている。しかし、新潟県の大学進学率は全国最下位クラスにあり、高等教育機関の充実整備を求める声が各方面からあがっている。その中で新潟産業大学は、県内における数少ない高等教育機関の一つとして大きな注目を集めている。

私は三十年にわたって地方政治に携わってきた関係から、全国のいろいろな都市を視察する機会に恵まれ、都市発展の要因について考えてきた。工業で生きる街、商

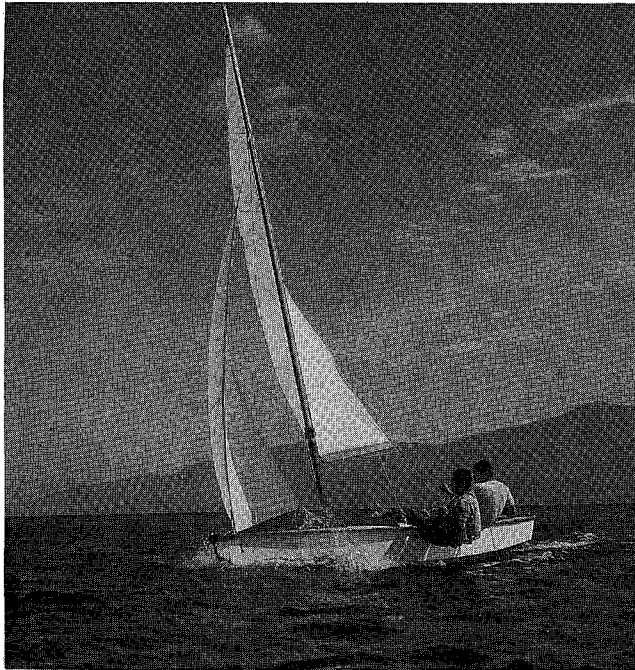
業で栄える街、観光都市などいろいろあるが、地方都市発展の鍵は何と言っても地域における人材の育成と、それを基盤とした産業の振興にあると確信している。

柏崎市が新潟産業大学の設立に對して物心両面から多大な支援を行ってきたのは、そうした観点に立ってのものである。そして、この新潟産業大学は、当市が一方で進めているソフトパーク（情報開発学院、情報開発センター）とともに、社会に寄与する有益な人材を育成し、地域社会との交流を活

発に行うことによって、地域文化の向上や産業の振興など、地域の発展に大きく貢献するものと心から期待している。

また、大学にとっても地域を挙げての協力やすばらしい環境など、地方都市に立地するメリットも大きい。

地方都市が大学を核として地域の活性化を図り発展していけば、東京への一極集中から、多極分散、国土の均衡ある発展が図られ、真の地方の時代を迎えることができるのではないだろうか。



### 大学の設立に関与して

副学長 荆 木 久 弥

大学づくりの仕事が、いよいよ胸突き八丁に差ししかかっていた頃、教職員や設立準備関係者の陣頭に立ってこの大事業と取り組んでおられた金田学長に、私はふと、善導和尚の『往生禮讃』の中にある『自信教人信 難中転更難 ムム』という言葉を思い出し、「難中転更難とはまさにこのことですね」と申し上げたことを覚えている。

大学の設置が、大学設置基準の条件を満たすべきは当然のことながら、この基準が最も厳格に適用されて、寸分の隙もなくチェックを受けるのが大学づくりのときである。施設・設備その他の条件整備は勿論のこと、就任予定教員については厳正な審査が行われる。加えて、財政面における現状と見通しが徹底的に洗い出され、安定性と確実性に疑問のあるものは、

容赦なく排除され、否認される。この厳しさを、最近に設立をみた他大学はどう切り抜けたのか、参考になる情報をと学長が努力されても、どの大学も口が固い。関係者一同、不退転の決意を胸に、厳しさを覚悟で始めた事業とはいいながらあまりにも多様な難題の続出に、大学づくりの難しさを今更のように思い知らされて、ほとほと当惑した。

やるだけやっていると口では言うものの、果たしてどこまでやればいいのか皆目その見当がつかないだけに、最後の審判が出るその日まで、不安と苦勞は途切れることなく続いた。今でこそ快い思い出として語れるが、緊張の日々を、辛い仕事に耐えて頑張ったあの顔の顔が、今も私の脳裏に焼きついて離れない。私のお手伝いは極めて些細であったが、貴重な体験を胸に収め、扱て今度は、みんなでの大学の躍進のために——思いはただそれに尽きる。



# 学生に求む

学生部長 光益 徹也

考えて見ると、まるで一曲の戯曲を見るような、治乱興亡の時代であった昭和の時代も終わり、新しい平成の年代に入りました。

時代の節目、歴史の節目と云う大変有意義な時期に重なるように、我が新潟産業大学が発足したわけで、我々教職員も学生諸君一同も感無量のことと思えます。

新しい大学の発足にあたり、一番重要なことは、私学として、その独自の建学の精神を求めなければなりません。新しく独立した国家が先ず国旗と国歌を制定し、憲法を作り、その旗と歌のもとに一致団結してこそ初めて国家が成り立つものです。大学も同様で、その建学の精神を掲げ、大学の伝統の礎を築くのも外ならぬ我々と学生諸君の努力に依るものです。

慶応大学も早稲田大学も同志社大学も皆この建学の伝統で今日の隆盛を見ております。

ひるがえって考えますと、大学の一回生、二回生程幸せんことではありません。自分達の努力がそのままその大学の基盤と伝統を形成するからです。そう云う意味で、存学の一、二回生諸君は大学の将

来は自分達の双肩にかかっていると云う自覚をもってもらいたい。

次に、新設大学は既設の諸大学に追いつかねばなりません。大学だけではなく卒業して社会に出た場合、既設の大学の卒業生と対等に肩を並べるだけではなく、ある意味、ある点で彼らを凌駕する何かを身につけていなければなりません。

新しい大学は大学が整備されるまでにある年月を要します。然し学生はその年月を待てません。卒業すればすぐ新潟産業大学卒業と云う肩書きやゼッケンを負わされて生きてゆかねばならないからです。その何かとはただ一つ、誰にも劣らない取柄を持つことです。それは何でもよい。他人の追従を許さぬある特技を身につけることです。何か一つの事に熱中する青年のエネルギーは社会に出て何よりも役に立つものです。情熱は何者をも変形燃焼させます。人生で情熱が人間最大の価値だと云われるのはこの事に他なりません。

柏崎市は外から見ると品行方正な小さな都市です。然し嬉しいことには、何も汚染されていない土地

柄で、町としても大変純粋な土地です。こう云う純白の土地に新しい大学が設立されたのですから、我々は大いに各自それぞれ、自分の目的に向かって情熱を燃やそうではありませんか。

私事で恐縮ですが、私なども他人からは一寸信じられない程、財界官界に友人をもっておりませんが、彼らが申すには「まず新しい大学では学力は兎も角、何か他人に秀でる一つを身につけてきてくれ。社会がほしいのはそう云う人間だから」と皆共通のことを申します。

産業大学は産業人を養成する大学です。今、東京はロンドンやニューヨークを追い越して名実共に世界の商業の中心都市になりました。毎日のニュースの画面にその時々円相場が報道される国は諸外国にはありません。この一つを見ても現在の日本の世界に於ける経済的位置がご理解と思います。正に前途は希望に満ちた開かれた世界が待っているのですから、若い人の言葉通り、頑張らなくちゃ。



# コンピュータ室から

コンピュータ委員会 村山 実

## — コンピュータ実習室紹介 —

新潟産業大学がスタートして、やがて一年を経過します。伝統的な経済学の上に、さらに新しい経済学を学習するに、欠かせないのがコンピュータです。創設以来いろいろ検討が加えられ、次のように計画され、ここに導入されました。

実習室は本学本館の3階に約一七五坪で、図1のように実習室と準備室からなっています。クリアム色の壁に茶色の床は落ち着いた雰囲気をかもし出し、照明は半間接照明で、光がスクリーンで反射することがなく、快適なプログラム開発のできる環境です。

計算機はNEC製 PC-9801 DX41で20Mbyteのハードディスクが装備されたパーソナルコンピュータです。コンピュータ実習はもとより、経済関係の専門の授業にも十分に利用できる環境となっています。総数七〇台が装備され、授業は一人で一台中占有でき、ゆとりのある体制がとれます。総額四千四百万程度(うちソフトウェアが二百二十万円)投入し、十分に機能を発揮できる体制を整

えたので同窓生諸氏はもとより、関係各位の御見学を心よりお待ちしております。

## — 今後の展開 —

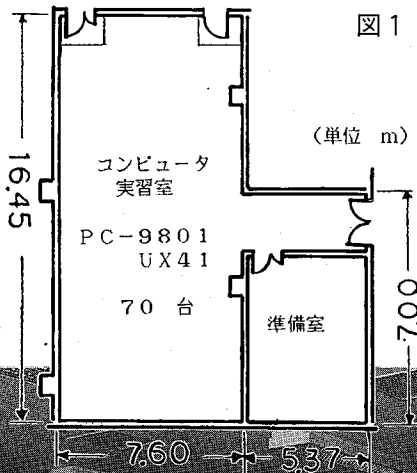
準備室には中型機を導入できるスペースを確保しましたが、最近のワークステーションが中型機以上の機能を発揮することから、今後ワークステーションの導入を検討する必要があると考えています。

JUNETをはじめ他大学、他機関とのネットワークへの参加の選択や、OS(オペレーションシステム、計算機の基本ソフト)の統一(特にUNIXの統一)を考えると、メーカーならびに機種を選定しにくい状況にあります。情報ネットワークの進展が急速であるため、できるかぎり早急に導入し、ネットワークに参加することが重要でしょう。

また、当大学では、ワークステーションによる家庭学習システムを検討開発中です。公衆電話回線を利用し、家庭から大学のシステムを利用する方式です。地方のパソコン通信では全国でも有名なKSNNETの協力も得て、新潟産

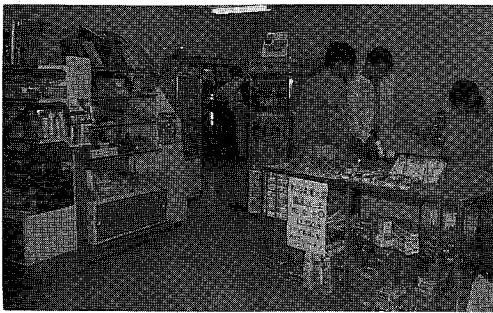
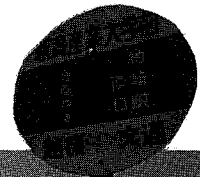
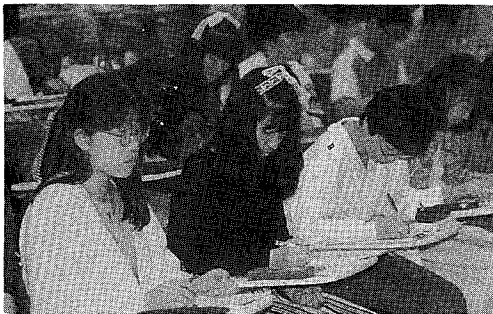
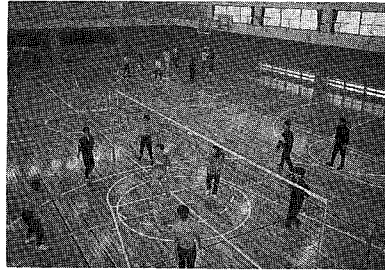
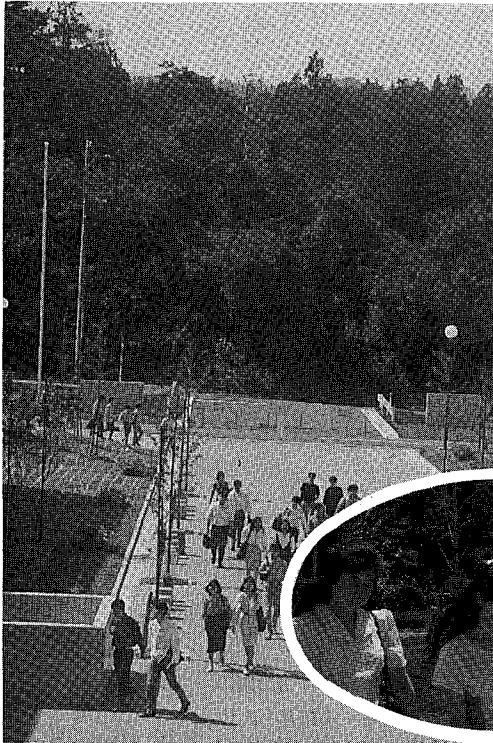
業大学独自のシステムの構築を計画しております。

地方にある大学の大きな役割の一つに地方社会への貢献ということがあります。このシステムが柏崎市へ開かれた大学へのトリガとなることを祈っております。





キャンパスライフ



O.B 通信

榑松坂屋理事 岡田 吉弘

日本はいま、世界で最も豊かな時を迎えております。経済大国の次元を超えて、外には債権大国、中には内需大国と云われております。また更に、新たな成長の大きな波が、産業だけでなく一般大衆の生活にも押し寄せてきています。これからは情報化・ソフト化・国際化と社会・経済環境は加速度的に進展します。

学園の皆さん、日本の新しい経済計画「世界とともに生きる日本」ご承知と思えます。これを実現する主役が皆さんです。主役である自分自身を磨くため、よりきつたため、自己投資は惜しみなく積極的に、新時代に即応した行動・志向がいつでもとれるよう、真の力を備えられるよう期待します。

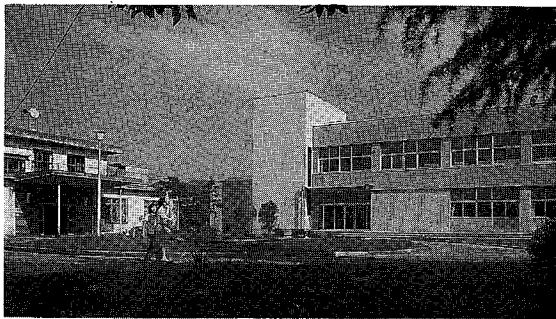
欠乏の時代に学び、四〇年を懐古 大学の新創立、新発足を祝して。  
(昭25・柏専第一回卒)

# 新たななる母校へ

新潟産業大学校友会会長

磯部 卯之吉

戦後間もない昭和二十二年春、柏崎専門学校（旧制）として産声を上げた母校は昭和二十五年春には学制改革により柏崎短期大学として新発足、その後新潟短期大学と校名を変更して四十年余の歴史を築いて来たが昨春県内初の私立の四年制単科大学に改組転換し、新潟産業大学へと生まれ変わった。所も柏崎市の比呂（ひら）生まれ変わった。安田へ、そして此処軽井川へと移った。ここに大学に相応しい立派なキャンパスが出来た。これは新潟県、柏崎市、近隣町村及び地元関係者の絶大なご支援によって成し得た大事業であり、感謝の極みである。しかしながら改組転換とは申せ現実には母校「新潟短期大学」の名前が無くなる事に一抹の淋しさを禁じ得ず短大を存続させ



我々の母校は無くなるのではなく新潟産業大学として生まれ変わりと大きく成長して行くのだ。「我々の母校は新潟産業大学である。」同窓会をはじめ、柏崎専門学校関係者の意思統一を見たのである。産大の学生諸君も四千名余りの先輩のいる事と四十年余の尊い歴史の上に築かれた大学である事を決して忘れないでもらいたい。大学の入口で優しく学校を見守っていて下さる学園創設者、下条恭兵先生の建学の精神は新潟産業大学によって永遠に引き継がれて行くものと固く信じて疑わないものである。（昭25・柏専第一回卒）

## 夢とロマンを求めて

明治大学農学部助教授

新田 貞章

この度は、新潟短期大学から新潟産業大学へと脱皮・飛躍され、同窓生の一人として、心からお祝いを申し上げます。我々の入学した年は、いわゆる六十年安保の年であり、反対のデモ行進に参加した記憶があります。地方の未だ舗装もされていない田舎道をホコリをたてながら行進した体験は、我々に初めて学生としての自覚と自由、解放感を与えてくれました。卒業して東京でさらに学ぶ決心をしましたが、東京での学生生活や学生運動の原点は、新潟短期大学での貴重な体験にありました。地方の大学では、都会の大学では味わえない豊かな自然環境、静かな環境、素朴な人間的ふれあい

（昭37・短大第十二回卒）



## O・B 通信

NTT柏崎電報電話局長

網島 正幸

昭和三十一年三月に卒業して三十二年、当時の電電公社（現NTT）に入社、六十二年一月から地元柏崎電報電話局に勤務しております。

また、NTTには多くの同窓生が管理者、中堅社員として活躍しており、同窓生の一人として誇りを感じております。

母校新潟短期大学が四年制の新潟産業大学として生まれ変わったわけですが、新たな発展を心から喜び申し上げますとともに、新しい時代、すなわち、高度情報化社会を担う多くの人材を送り出していただきたく切に望みます。（昭31・短大第六回卒）



# 新潟短期大学

## 最後の卒業生として

新潟短期大学 自治会長 佐藤 松雄

私達は学生時代の貴重な時間を新潟短期大学において過ごせたことに誇りと喜びを覚えます。目前で我が短期大学は幕を閉じます。教授の方々から学ばせていただいたことや日本各地からの学友との出会いを通して良い経験をさせてくれました。

学生時代という時期は人間形成において重要なウエイトを占めるものです。我々はこの時期、新しい学舎において本校の学生のみならず新潟産業大学生との交流がもてたことも大変喜ぶべきことです。よく永遠の未完成こそ完成だと人は言いますが、卒業にあたり新潟短期大学の長い歴史と伝統に恥じぬ最後の卒業生でありたいと思うと同時に、この二年間養われてきた精神をステップに新たな旅立ちへ望みたいと思います。そして、願わくば産業大学生の方々にも卒業の際には一人でも多くの人に同じ感覚をもってほしいと熱望します。

我々に様々の刺激・発見・驚き・悲喜こもごもの思いを与えてく



れた母校との別れを惜しむとともに新潟産業大学の輝ける未来に期待します。(平成元年3月卒)

# 入学後一年にして

## 今 思うこと

新潟産業大学 学友会副会長 長崎 友来

私達が入学して間もなく一年が過ぎようとしている。一口に一年とは言うものの、ある者にとっては非常に短い一年であり、またある者にとっては、気が遠くなるほどに長い一年であったのではないだろうか。

「第一期生」という言葉が常についてまわる私達のこの一年は、それがプレッシャーになった場合も多々あったが、それが良くも悪くも「私達自身の大学」という気持ちを強固なものとした。一年前に何もかも新しく、右をみても左をみても何もないといった所からスタートした本学と私達。一体私達は何を求められているのだろうか。

全てが無から始まるという事は逆に言えば、何ものにも縛られる事なく、そして、煩わしい伝統という名の制約を受けることもないのである。更に言うならば、私達一期生、そして、これから入学して来る若い学生の大学に傾ける一人一人の情熱が伝統であり、大学の真のエネルギーなのではないだ

ろうか。

残念な事に今の本学には、そういったエネルギーや一瞬にかけるパワーといったものが弱いように感じられる。もとを正していけば、自分をはじめ学友会組織がまだ力不足であり、学生のパワーを煽りきれない為ではないかと今年一年を振り返って感じた。しかし、学友会とは本来、学生が動かすものであり、学生を動かす為の統率組織ではない。つまり、メインになるのは多数の学生であり、学友会はそれを良く見せるための刺身のツマみたいものでしかないのである。

来年度は私達は先輩と呼ばれるようになる。自分自身の中では、まだ後輩に何がしてやれるか解らないが、飲み屋の勘定を押しつけるような先輩にだけはならないようにしようと思っっている。

(1年)

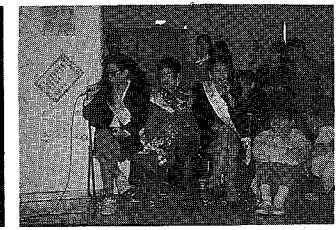
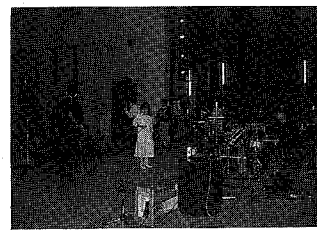
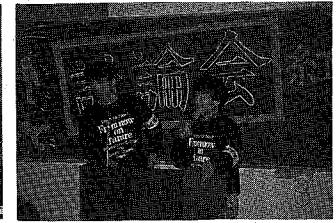
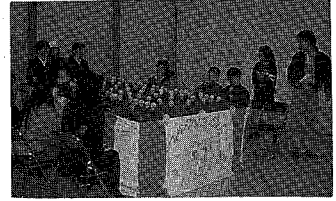
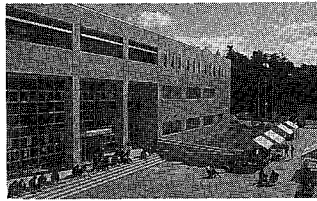
# O.B 通信

柏崎商工会議所事務局長 内藤 信寛

時代の要請に依って、短大から四年制大学へと生まれ変わった母校に大きな期待を寄せております。現在、我が国経済は内需主導型産業構造への転換や生活の質的向上の実現に向かっており、地域経済においても従来のような工場誘致依存型の地域振興とは異なった施策、つまり、地域内発型の都市型産業育成や地場産業の活性化といった新たなフロンティアの開拓が求められております。

新潟産業大学が人材の育成や学術研究を通じて21世紀にむけた地域づくりに貢献してくれることを切望しております。





### 学生の自主運営行事に想う

学務課 中村 真一

学生自身が自主運営する学内行事を自ら決定してゆく過程には、誠に興味深いものがあります。現に昨秋軽井川新キャンパスで迎えた学園祭は「紅葉祭」と学生自身が命名し、その企画内容を詰めゆく過程で、当初学芸会的発想に終始していたものが、徐々にアカデミックな構成美をもつ構造のものへと成っていったことです。

それは学生個々の行動が真に自らに由り成されてゆく過程で、おのづから自らを律するに至り、然して自らを治める時を迎えるドラマチックな変貌をとげたことです。「自らに由ること。」このことの何んと意義深く、かつ尊いことか。「自由」は、いかに学生自身に成長を求め、自立を課し、独善にも独断にも留まることのない自覚へと導き、人格の陶冶を成すものか。

いっしょ企画内容について討論を交わす学友間にあつて、遂に互いの意見の中に各々の主張を見出し得る教養の深さと成り、互いの主張を認め合える信頼感を生みだす。

この学生らの姿は、日常的に学生と接する私にとって、いよいよ

学生一人一人が輝く存在となって映ってくるのでした。

このように本学園に在る学生の自治活動は、真摯な自己洞察を通じて発見する自らの固有性と他者の認知、そして学友との新たな信頼感の共有から成立するものと思えます。

そして今在る学生のこの活動で得た精神こそが本学園の四十年に及ぶ伝統の中で先輩より後輩へと共に歩む過程で培われてきた「学風」といえるものと思えます。さて、今年はどうなドラマが展開されるのでしょうか。今から楽しみです。

### 編集後記

広報委員 菅野 英機

皆様方の御協力のお陰ですばらしい学報が出来上がりました。とりわけ多忙の中、心よく原稿を引き受けて下さった関係者各位に心より感謝申し上げます。

今回は創刊号ですので各方面の御挨拶が多くなりましたが、次回からは大学の現状報告や学生達の生活の様子、先生方の随想や学業散歩、また最近書かれた論文や著書などの紹介などが中心になるものと思えます。ご期待下さい。

## 青海波とは

「青海波」は、唐楽（中国から伝わった雅楽曲）に属する舞楽として有名である。源氏物語などの古典の中にもしばしば現れ、現在でも代表的な舞楽として演ぜられる。因みに有名な「越天楽」は、同じ唐楽であるが、曲のみで舞は伴わない。

「青海波」の舞には、千鳥模様の袍の下に波形の模様を描いた下襲を着用する。越天楽のメロディーは黒田節などの俗謡になって拡まったが、青海波のデザインは、和服の模様となつて拡まった。両者ともそれぞれ現代の生活の中に生きている。

どんな波でも媒体自体は動かない。海の波も海水自体が流れるわけではなく、相異なる水の分子の間を形と動きが伝わるだけである。「青海波」も、形と動きのみが、和服の模様、また謡曲中の語句、清元や尺八の曲となつて伝わっているわけである。郷土柏崎「海」波。波は、よく観察してみると、雲以上に、時々々の気象で形を千変万化する。我々は、波のように、時々々の世の風を敏感に捉え、それを伝えてゆきたい。(IK)

(題字は金田一郎学長)